

住宅内空間の現代化とその生活的意味—とくに食事炊事空間の変化過程を中心にして（大阪を中心とする地域の都市部の住宅の事例）

大阪工業大 塩谷寿翁

目的・方法：住宅内空間の構成にあらわれた連続性と変化とを1950年代と80年代にわたる時期の前後でとらえ、その現代化の要因を日常的な住宅内生活の諸側面からさぐる。既報⁽¹⁾では、表題の都市部の住宅の実態調査⁽²⁾の結果をもとに、食事炊事空間を中心にした平面的な構成の型式とその展開動向をとらえた。これにつづいて小稿では、その規則性および変化要因の一端を日常生活の諸過程（とくに接客、更衣・入浴・食事）における部屋などの使われかたから事例的に追求する。

結果の要約：①対象住宅の住宅内部の空間の構成は、家族生活空間を形成している食事室兼台所（または台所）を中心とする部屋の配列のされかたにつよく関係している。その平面型式は食事室兼台所とそれにつながる「和室」および「洋室」⁽³⁾からなる配列が支配的である。②これらの部屋は複合的な使われかたをしており、家族生活行為と個人夫婦の生活行為とは場的にわけられていない。また一般的に続き間座敷・座敷は家族生活にとられた部屋とは分離された位置におかれており、家族生活や日常的な接客生活の中心になっているとはかんがえにくい。③これより、和から洋への部分的な置換がおこり和と洋の両要素が統合されている都市部の住宅にかぎっていえば、現代住宅の平面構成とその意味の追求は、食事室兼台所とともに家族生活空間を構成する「和室」のもつ生活的意味と覺じきでない部屋がふえる現象の意味の考察が中心となる課題になるのではないかと筆者はかんがえる。部屋などの使われかたの詳細は記述を略し口頭で報告する。

(1)塩谷寿翁「現代住宅における和室のもつ生活的意味—大阪を中心とする地域の都市部の住宅を事例にして」『生活学会報』第14巻第2号、pp.16-20, 1987年。

(2)大阪府およびその周辺地域の都市部の専用独立住宅を対象にした「住まいと住まいかたの実態調査」。1985年7月～8月および12月～86年1月にかけて実施。対象戸数309戸（大阪工業大学建築学科の学生の家族の住宅）。対象住宅はおもに1980年代の後半期以降の時期に建築、同時期の典型となり平準化する規模をうまわった水準にある。

(3)「和室」；畳がしきつめられた部屋。「洋室」；畳がしかれていない部屋。